

これは、江戸時代、徳川家光が世を治めていたころの物語である。

徳川幕府はもはやゆるぎがたいものとなり、戦国時代の殺伐とした空気はうすれつつあった。時の将軍家光は、世の太平に飽きたらず、尚武の気風を高めようと考え、スポーツの中のスポーツ、卓球を奨励した。

このため、日本は卓球一色に染まり、卓球選手にあらずんば人間にあらず、とさえいわれた。人はみな腰にラケットを帯び、ふところには常にピン球をしのばせていたものである。今からは考えられぬような、この卓球桃源郷で、信じがたいような達人が数多く出たのは、当然と言えよう。

その朝、秋月六郎太は、心気が冴えわたっているのを感じた。宮本武蔵との御前試合の日である。

六郎太が将軍家光の目の前で武蔵に勝てば、彼は、幕府にとらわれている秀太郎をわが手にとりもどすことができる。秀太郎は豊臣の血をひくただ一人の子であり、たとえ六郎太が勝ったとしても、家光が簡単に彼を返すものとは考え難かった。しかし、秀太郎を救う方が他にない以上、六郎太は勝たねばならなかったのである。

彼は朝の光の中、ラケットを持って裏庭に出た。からだじゅうに気力がみなぎってくるのが感じられた。そして、それがあふれんばかりの最高潮に達したとき、彼は裂帛の気合と共に素振りした。ドサドサツと音がしたのはその直後である。彼の気合にあてられて、木々でさえずっていた小鳥たちが、気を失って地面に落ちる音であった。

御前試合はその日の午後、異常な緊張のうちにはじまった。

家光はすでに、卓球師範柳生但馬守宗矩に両者の戦型分析をさせている。

宮本武蔵の武器は、范長茂のようなエグイ投げ上げサーブと、ヨハンソンのような猛烈な強打であった。必勝の信念をもって真っ向からうちこんでくる豪快な球を受けきれたものは一人もいない。彼の顔面スマッシュをくらって命を失ったもの数は、はかりしれなかった。

一方、六郎太の武器は、アペルグレンのような堅い守りと、江加良のような強烈なカウンターである。人里はなれた野山の中で、自然を相手にきびしい孤独に耐えながら会得した

無心卓球は、靈妙の境地に達し、まさに不敗であった。

家光が目をも皿のようにして観戦する中、双方の死力をつくした猛ラリーが連続する。戦型分析の後で宗矩が予言したように、それは空前絶後の死闘なのであった。

互いに抜きつ抜かれつ、ポイントを重ね、ついに試合は大詰め、セットオールのジューズとなった。

このときすでに、両者は立っているのがやっとという状態であった。武蔵は、六郎太の異常に短いサーブ(ネットぎわに落ちて、相手コートにもどつてゆく)を取ろうと必死になるあまり、危険をまかえりみず台にぶつかつていき、不幸なことに武蔵の足の長さは台の高さとぴたり一致しているものだから、すさまじい激痛で死にかけていたし、六郎太は武蔵の破壊的なスマッシュをいくつか受け損ねて胸にあててしまい、呼吸困難に陥っていた。だが、家光から見ると、依然、武蔵は気魄满满ですさまじい殺気を放ちつつラケットを青眼に構えていたし、六郎太はといえば、双眼をとしてその顔に静止相をたたえつつ、ラケットをだらりとさげたその着流しの姿を微動だにさせていなかったのである。

さて、ジューズからのサーブは六郎太である。六郎太は、例のたまりサーブを警戒するに当って、相手コートのエッジをかすめるスーパーサーブである。さすがの武蔵もアツとなって腰が砕けたものの、死にもぐるいの執念をもってボールをこすりあげた。執念のこもったそのボールは、いったんエンドラインを割りながら、その回転により六郎太のコートに戻ってきた。そして、ネットを直撃したのち六郎太のコートの上をコロコロところがったのである。六郎太は手も足も出なかった。

「見たか六郎太。これぞ秘技ブーメランプルだ。このブーメランプルで、いよいよ引導を渡してやろうぞ。」と、気をよくした六郎太はうそぶいた。が、六郎太は動揺の色をみじんもみせない。ロもとには笑みさえうかべているように見えた。

サーブは武蔵に渡る。彼はわざと単純なカットサーブを出した。これに対して六郎太が時速一〇〇キロのつつつきで応じたのはさすがであった。しかし、それにひるむような武蔵ではない。彼はまっていたとばかりブーメランプルを送った。球は六郎太の頭上を超え、空中で停止したかと思える間に、ネットに向かって突進していく。

パチツという冴えた音がしたのはそのときである。次の瞬間、武蔵はムムツとうなっていた。球がふたたびエンドラインを超える前に、六郎太がこれを手で払い落としたのである。六郎

太は武蔵の単純思考を機敏に利用して、冷静にポイントを手にした。

ふたたびジューズとなり、六郎太にサーブがまわった。六郎太はしばらく何かを考えているふうであったが、意を決し、無言の気合いをこめてしゃがみこみサーブをくりだした。六郎太得意のエッチサーブか、と武蔵は身構えたが、そんなものではなかった。ボールは、台の高さの水平面上を、えぐるようなカーブを描きつつ飛び、ネットを迂回して武蔵側のコートに乗るや、つつとところがっていったのである。武蔵は啞然となった。六郎太はこの土壇場で、絶対にレシーブ不可能なサーブを編み出したのである。見事というより他はない。

マッチポイントを握った六郎太だが、サーブは武蔵がもっている。しかも、武蔵はすでにシヨックから立ち直り、これまで以上の気魄をみなぎらせている。この一本こそが生死を決するのだと、六郎太は腹を決めた。

武蔵は一瞬、目をぎらりと光らせたかと思うと、次の瞬間、キエーツという気合いと共にボールを投げ上げた。どこへ来るか、どっちに曲がるか全く予測のつかないサーブである。家光はそのとき、六郎太の方を見てわが目を疑った。六郎太はつと左半身になり、ラケットを自分の身体で隠してしまったのである。これは、自分を絶対の窮地に追い込むことによつて、かえつて心機をつかみ、思わざる働きを生もつとするものであった。まさに、敵の無限の変化に対応するための最後の手段であつたといえる。

武蔵のサーブが炸裂する。フォアサイドを切つて逃げてゆく球だ。ところが、このサーブが六郎太のコートですさまじい変化を見せつバウンドしたときも、六郎太はそのままのつそりと立っているだけだつた。

決まった、と誰もが思った。その刹那、六郎太の姿が消えてフォアサイドに飛んでいた。驚くべきことに、誰もラケットに当たることがかなわぬような武蔵のサーブを、六郎太はコーラスさえついで返したのである。

しかし、もとより武蔵に油断があるべくもない。すかさず攻め込んだ武蔵の攻勢がつづく。六郎太、武蔵の剛球をよく返し、居合抜きカウンターも放つたものの、半狂乱の武蔵の勢いに押され、ついにロビングに追い込まれてしまった。天井すれすれまであがり、白線におちるロビングは、奇跡としか思えなかつた。

しかし、こうなると、かえつてスマッシュを打っているほうが先に疲れてしまい、不利になる。ついに武蔵は、今が勝負の時、と決断し、ひらりと高くとびあがり、ボールが頂点にあがつたところを渾身の力をふりしほつて打つた。そのとき、六郎太の速影もまた、高くとびあ

がっていた。

ラリーは終わった。両者は同時に降り立った。球はどこにも見当たらない。何が起こったのか、誰にもわからなかった。武蔵はカッと目を見開いて六郎太をにらみつけていたし、六郎太は再び目をとじて石像のように立っていた。思い沈黙の時間が流れる。

が、ついに均衡が破れた。武蔵の巨体が徐々にくずれ、床に伏したのである。その口からは、ごぼと鮮血が吹き出し、それとともに、赤く染まったボールがごぼれ出た。六郎太の無念無想のカウンターが決まっていたのであった。

「勝った。」六郎太はこうつぶやいて、ガクッとひざをついた。

その後、秀太郎は自由の身となり、六郎太も戦いの傷が癒え、二人を大名にとりたてようという家光の好意を辞退して、みんなで卓球して幸せにくらしみましたとぞ。

——完——

解説

「運命峠」というのは柴田錬三郎の代表作ともいえる、愛と感動の大スペクタクル巨編です。私はこれを幾度となく読みかえし、主人公秋月六郎太のかつこよさにため息をつきつつ、剣の道というのがいかに卓球に通ずるものをもっているかを悟りました。そこで「運命峠」をネタ本に卓球小説を書いたのです。しかし、筆力不足のため、秋月六郎太のヒロイズムがちつとも写せなかったのが残念です。

ところで、この物語は一見とてもおめでたいのですが、実は後日談があります。この試合を見たあと、家光公はあまりのすさまじさに寝込んでしまい、これを見た春日局が家光をむりやり、あの軟弱な庭球に転向させたのです。そのために、あんなにはやった卓球はすたれ、今日こんなにマイナーになったのであります。